

令和7年度 大妻データサイエンス・AI教育プログラム 自己点検・評価

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

情報リテラシー教育検討部会	
(責任者名) 山倉 健嗣	(役職名) 部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>情報リテラシー教育検討部会において、大妻データサイエンス・AIプログラムの履修・修得状況を次のとおり報告した。（下記履修者数は、前期履修登録時点）</p> <p>[ 家 政 学 部 ] 履修者数35名 (R6_18名 R5_13名) ⇒ 修了者数29名 (R6_15名 R5_8名)                      [ 文 学 部 ] 履修者数13名 (R6_8名 R5_1名) ⇒ 修了者数15名 (R6_8名 R5_0名)                      [ 社 会 情 報 学 部 ] 履修者数119名 (R6_76名 R5_87名) ⇒ 修了者数107名 (R6_69名 R5_78名)                      [ 人 間 関 係 学 部 ] 履修者数77名 (R6_24名 R5_19名) ⇒ 修了者数85名 (R6_22名 R5_16名)                      [ 比 較 文 化 学 部 ] 履修者数10名 (R6_14名 R5_12名) ⇒ 修了者数7名 (R6_10名 R5_11名)                      [ データサイエンス学部 ] 履修者数5名 (R6_1名 R5_1名) ⇒ 修了者数3名 (R6_1名 R5_1名)                      [ 短 期 大 学 部 ] 履修者数3名 (R6_5名 R5_1名) ⇒ 修了者数2名 (R6_1名 R5_0名)                      【合計】履修者数262名 (R6_145名 R5_133名) ⇒ 修了者数248名 (R6_125名 R5_113名)</p> <p>プログラム開始から3年目となり、データサイエンス学部が新設されたことより対象学生が増えたこともあるが、『新入生案内』への掲載やクラス別ガイダンス時の説明が奏功し、着実に履修者が増加している。なお、履修者数よりも修了者数が多いものについては、後期に実施された追加履修登録による履修者増の影響である。</p>
学修成果	<p>学修成果は、「大妻データサイエンス・AIプログラム修了者アンケート」において、プログラムを構成する科目の到達目標に達したか確認するとともに、プログラムの共通科目である「データサイエンス・AI概論」の成績分布を調査し、本教育プログラムの評価・改善に活用している。令和7年度の結果および令和5年度からの推移は次のとおりであり、プログラム開始以降肯定的な回答が多い。次年度以降も同アンケートの結果により、経年変化を確認する。</p> <p>【データサイエンス・AI概論の到達目標への到達度】                      「そう思う」61.0% (R6_58.8% R5_53.8%) 「少しそう思う」36.4% (R6_39.7% R5_44.2%) 合計97.4% (R6_98.5% R5_98.0%)の学生が肯定的な回答であった。</p> <p>【コンピュータ基礎B、情報基礎DS（表計算活用・データリテラシー）、情報処理実習A、情報処理実習B、コンピュータの基礎の到達目標への到達度】                      「そう思う」58.4% (R6_61.8% R5_66.0%) 「少しそう思う」35.1% (R6_36.8% R5_30.2%) 合計93.5% (R6_98.6% R5_96.2%)の学生が肯定的な回答であった。</p> <p>【データサイエンス・AI概論の成績分布】                      昨年度に引き続き、各回ごとの成績分布に差が生じている。5点を満点とした際の平均点で0.97～3.56までの開きがあるため、成績差が著しいと言える。この現象はオムニバスで実施していることに起因しているものと考えられる。引き続き大妻女子大学成績評価に関するガイドラインに沿った授業レベルの設定について周知する。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>学生の内容の理解度については、プログラムの共通科目である「データサイエンス・AI概論」の授業改善のためのアンケート（設問7：この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。設問8：あなたは授業に満足しましたか）によって自己点検・評価を実施する。令和7年度の結果および令和5年度からの推移は、次のとおり設問7、設問8共に肯定的な回答が大幅に増加しており、授業の満足度が上昇していることがわかる。これは担当者に対するアンケート結果のフィードバック等が奏功しているものと考えられる。次年度以降も同アンケートの結果により、経年変化を確認する。</p> <p>設問7：この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。                      「そう思う」56.0% (R6_44.9% R5_57.8%) 「少しそう思う」39.9% (R6_43.4% R5_33.6%) 合計95.9% (R6_88.3% R5_91.4%)の学生が肯定的な回答であった。</p> <p>設問8：あなたは授業に満足しましたか。                      「そう思う」49.7% (R6_41.1% R5_51.6%) 「少しそう思う」43.0% (R6_35.4% R5_32.4%) 合計92.7% (R6_76.5% R5_84.0%)の学生が肯定的な回答だった。</p> <p>その他、「大妻データサイエンス・AIプログラム修了者アンケート」ではプログラムについての感想や改善してほしい点も確認しており、「AIやパソコンの使い方について、少し自信がついた。」「将来の役に立ちそうだと思う。」「自分の知らない知識を沢山学べてよかった。」というプログラムの到達目標と合致する意見があった一方で、「授業回が進むにつれ、特に最後の方は個人的に内容が難しく、理解するのが難しかった。」「専門用語ばかりで分かりにくい授業もあったので、用語の解説からして貰えたら嬉しいです。」などの意見もあり、次年度以降の授業内容改善に活かす。</p>

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度		後輩等の学生への推奨度は、情報リテラシー教育検討部会が実施する「大妻データサイエンス・AIプログラム修了者アンケート」において、「友だちや後輩に受講を検討している人がいたら、プログラムをお勧めすることができますか」という設問を設け確認し、本教育プログラムの評価・改善に活用している。その他、同アンケートでは「プログラムについての感想や、改善してほしい点等があれば記入してください」という自由記述設問も設け、学生視点の改善点も確認している。友人等への受講推奨については、回答者の91%が「そう思う」もしくは「少しそう思う」と回答しており、この点からも本プログラムに対する満足度の高さを伺うことができる。一方で、本プログラムに対する感想・改善要望への自由記述式回答の中には、「修了者用メールが来るまでこのプログラムのことを知らず、何も考えずに単位を取得していたので、もっとこういうプログラムがあることを宣伝した方が良いと思う。」という意見もあったため、広報や告知について改めて検討したい。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況		全学的な履修者数、履修率については、毎年情報リテラシー教育検討部会において共有し、現在行っている計画の効果を点検している。なお、本プログラムの履修希望者は年々増加しており、本プログラムの指定科目である「データサイエンス・AI概論」では、履修登録時に多数の抽選漏れが発生したため、R8年度より開講コマ数を増加させることを全学共通科目調整委員会（全学共通科目のコマ数を審議する委員会）にて決定し、500人であった履修上限人数を700人に増加させた。令和7年度の本プログラム修了者は、全員が当年度に「データサイエンス・AI概論」を履修している（3年生：20.2%、2年生：54.4%、1年生：25.4%）ことから、これまで抽選漏れしていた2年生以上の学生が履修の機会を待っていた可能性もある。なお、本プログラムは令和5年度以降の入学が履修対象のプログラムであるため、令和5年度の対象は1学年であったが、令和6年度は2学年、令和7年度は3学年と段階的に増加し、令和8年度になって初めて在学生全体が対象となるため（一部除く）、履修者の増加に合わせてプログラムの内容や広報をより一層充実させる必要がある。
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価		本プログラムは令和5年度入学生から履修可能となったプログラムとなっており、最初に対象となった学生が就職する時期が、大学の場合は令和9年度、短大の場合は令和7年度となる。本来であれば、短大を卒業して就職したプログラム修了者の声を聞くことができる時期となっているが、短大におけるプログラム修了者が極端に少ない（R5_0名 R6_1名 R7_2名）ため、それがなかなか難しい状況である。次年度以降に向け、プログラム修了時のアンケートにて卒業後の連絡先を聞くなどして、修了者の進路や活躍状況等を確認できる環境を構築していくこととしたい。本プログラムの修了者アンケートには、「IT企業に就職を希望するにあたって、予習ができたのが良かった。」や「ITスキルが身につく、就職活動でアピールできました。」、また、「大学の授業で体系的に学んだことで、文系出身であってもIT業界への心理的な抵抗感がなくなりました。将来SEとして研修を受ける際にもスムーズに学習に入っていけると感じており、今後のキャリアの土台として非常に受ける価値がある内容だったと思います。」といった声もあるため、追跡調査を行うことができれば、有用なフィードバックとなる可能性がある。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見		データサイエンス分野に関する協定を締結した企業と大妻データサイエンス・AIプログラムの内容・手法に関する意見交換会を令和8年3月に行った。意見交換会の主なテーマは、①大妻データサイエンス・AIプログラムの内容・手法について、②情報リテラシー教育として、大学・短大時代に学んでおいてもらいたい内容について、③企業における生成AIの活用事例や倫理教育について、などとした。その意見交換において、プログラム修了で身につく力に関して「データサイエンスやAIが身近にあるさまざまな事象とどのように関係しているかを学び、それらを活用することの楽しさや学ぶ意義について理解する。」「データサイエンス・AIを活用する上での留意事項や情報セキュリティ、情報漏洩等、データを守る上での留意事項を理解する。」としている点は、非常に評価できるとの意見があった。まずは学生に興味を持ってもらうことが重要であるとの趣旨からの意見であった。その他、大学・短大時代に学んでおいてもらいたい内容として、次の5点が挙げられた。 ・AIの適切な活用方法 ・ITに関する基礎用語 ・データを扱う上での倫理 ・数学で学ぶ内容の根本的な原理や考え方（解を導けなくても構わない） ・一般社団法人日本ディープラーニング協会のG検定 これらについては、令和8年4月に開催する情報リテラシー教育検討部会において、自己点検・評価結果として共有され、次年度以降のプログラムの内容に活かすこととなった。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解してもらうために次のような取り組みを行った。 ・モデルカリキュラムの導入と心得の内容を含む「データサイエンス・AI概論」は、授業のガイダンスとして、初回授業の前にプレ授業を設け、「学ぶことの楽しさ」「学ぶことの意義」を説明している。 ・複数学部の教員がオムニバスで担当することにより、学生自身の今後の学修と関係のある内容も含めることで「学ぶことの意義」を伝える工夫をしている。 ・担当教員がシラバスを執筆する際に参考とする授業概要には、データサイエンス・AIを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」に重きを置くことを事前に伝えた。 その結果、「大妻データサイエンス・AIプログラム修了者アンケート」ではプログラムについての感想や改善してほしい点の回答として「楽しく学ぶことができました。」「自分の知らない知識を沢山学べてよかった。」「基礎的なところから順番にわかりやすく説明してくれたので、面白かった。」というプログラムの到達目標と合致する意見があった一方、「授業回が進むにつれ、特に最後の方は個人的に内容が難しく、理解するのが難しかった。」などの意見もあり、次年度以降の授業内容に活かす。 ・本プログラムにて数理・データサイエンス・AI分野に興味を持った学生に向け、（本プログラム外の科目となるが）新規科目として「AI活用」を準備した。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること  ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	本学では、データサイエンス分野に関する協定を締結した企業との意見交換を年に1回行い、社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえた教育内容の見直しを行っている。 今年度も上記「産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見」のとおり実施しており、内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業を実施するために必要な意見をもらった。それらについては、情報リテラシー教育検討部会で共有しており、次年度以降のプログラムの内容に活かすこととなった。 情報系を専門としない学部（家政・文・人間関係・比較文化・短大）所属学生に対して履修を指定しているリテラシー科目について、当該科目の学習内容を明示するために名称を「コンピュータ基礎」から「情報基礎DS（表計算活用・データリテラシー）」へ変更するとともに、情報リテラシー教育検討部会で統一シラバスを作成することにより、複数開講される授業間における内容や水準の均一化と維持・向上を図ることとした。